

研究論文

文化資源としての語り  
相互扶助を越える Alcoholics Anonymous の意義

葛 賢 太

Narrative as a Cultural Resource:  
Alcoholics Anonymous beyond mutual support group

Kenta Kasai

関東学院大学「キリスト教と文化」第7号  
2009年3月発行抜刷

# 文化資源としての語り —相互扶助を越える Alcoholics Anonymous の意義—

葛 西 賢 太

Narrative as a Cultural Resource:  
Alcoholics Anonymous beyond mutual support group

Kenta Kasai

## 要 旨

有限の天然資源を分配するのと異なり、文化資源はむしろ積極的に使用し分配されることで、資源として生かされる。断酒自助会である Alcoholics Anonymous は、そのような文化資源の例である。アルコール依存症者にとって、断酒そのものは簡単だが、むしろ断酒後に諸問題と直面して苦しみ、再飲酒の危険に接することになる。また何十年断酒を継続しても、再飲酒したら即座に病状が戻る。このようなアルコール依存症という病気に対して、この団体 Alcoholics Anonymous は、自分の問題を語り合うミーティングによって、問題を認識的に明確化させ、情緒的にも力づけて、断酒を継続する力を得させる。しばしばミーティングは言いっぱなし聞きっぱなしの倫理相対主義的な場と誤解されてきたが、実際は、初期メンバーたちの経験が結晶された「12のステップ」などのプログラムによって倫理的な方向付けがなされている。このような文化資源は、積極的に活用され、伝えられ、また体得して工夫されることによってのみ、将来に継承される。文書化された「12のステップ」は、明文化されていない米国宗教・倫理文化や対人関係のありかたを前提にしており、このような無形の文化資源を伝え保つための努力が強く望まれる。

## キーワード

- ①文化資源
- ②無形
- ③「12のステップ」
- ④「言いっぱなし聞きっぱなし」
- ⑤ミーティング

## 目 次

1. 文化資源としての断酒自助会
  2. Alcoholics Anonymous の発見
  3. 文化資源としての AA を持続可能に
- 参考文献

## 1. 文化資源としての断酒自助会

人類の未来のために、資源を発見し、活用し、保持していくことは、常に重要な課題である。近年、「持続可能な (sustainable)」という形容詞を冠して、資源の活用と保持の方法論も盛んに論じられてきた。天然資源については、人類やその営為の継続そのものに直接関わるがゆえに重視されてきたが、それ以外の資源に関しては、専門分野の外の人々にとってあまり関心を持たれない。天然資源以外の諸資源も重要なのであるが。

本稿では、断酒自助会を文化資源として考察することで、どのような課題が明らかになるかを示す。

天然資源と比較したとき、文化資源も含む他の諸資源は、活用や維持のあり方が大きく異なる。天然資源は、有限であり、それゆえ

に乱用を防止して、適切に分配し、また効率よく節約され、計画的に「持続可能に」活用されなければならない。典型的な天然資源としては、原油や天然ガス、金属、植物などが挙げられよう。一方、共有可能な人工の諸施設（たとえば空港や鉄道、道路から公民館や体育館にいたるまで）などが社会資源と呼ばれる。有限であるのは同じだが、天然資源と異なるのは、効率よく共有を図りながら、最大限活用されなければならない点である。社会資源は、そのキャパシティ一杯を超える手前まで、活用されることが望ましい。社会資源に関しては、節約よりも活用が重んじられる。

文化資源は、有形のもの（文化財など）と無形のもの（芸術・技芸や思想・宗教）に大きく分けて考えることができる。有形の文化資源の場合は、維持保存するためには使用を制限しなければならない。歴史的建造物なら入場制限をしたり、壊れやすい芸術品の公開を控えたりも考える必要がある。一方、無形のものは、むしろ積極的に活用することによって維持保存が可能になる。無形の文化資源は人的資源によって担われるために、担い手による活用度はその文化資源の価値のパロメーターであり、それだけでなく、維持保存されるためにも多くの人々によく利用され深く理解されなければならない。そして、利用する人が周囲との交流の中でその文化資源の価値を伝えてゆかねばならない。このような資源の典型は思想、宗教、運動などの精神的な文化資源、あるいは舞踏や武道、儀礼などの身体的な文化資源である。そして、無形の文化資源を扱うばあいに注意すべきことは、明文化されていない諸実践を見落とさないことである。

ここで検討しようとしている断酒自助会である Alcohols Anonymous（以下 AA と略称）は、この点で典型的な文化資源であるといえる。以下では、文化資源としての AA の発見、意義、活用、維持について述べる。そのさい、

先行する宗教的禁酒運動、自分について物語る実践の二点に注目する。本稿の目的は文化資源として AA をとらえたばあいの課題を示すことにあるので、断酒のメカニズムなど別著で扱った内容は詳述しない [葛西 2007]。そしてこれらを踏まえ、AA という文化資源のうち、特に無形の部分をいかに継承し展開するかが重要であることを示す。

## 2. Alcoholics Anonymous の発見

### 2.1 ビルとボブの出会い

AA は、1935 年に米国オハイオ州で、ビルとボブという二人の大量問題飲酒者<sup>1)</sup>（当時はアルコール依存という概念がまだ存在しなかった）が出会うことによって成立した、断酒自助会である。彼らはともにオックスフォードグループというプロテスタント系の宗教運動に関わっていた。この運動が AA の思想や実践においては小さくない影響を及ぼしている。オックスフォードグループでは、他人に対して罪責感や引け目を感じるような私的な体験を、少人数の仲間との親密な場で正直に告白することにより、心理的に解放され宗教的に浄化されることを重んじていたのであるが、これとよく似たミーティングの形式が AA では行われているからである。しかし、二人の共同創始者がともにこの運動に関わっていたことは偶然であった。牧師のところに電話したビルが、自分と同様の問題を抱えた人を紹介してもらったのであるが、仲介した人と紹介された人がたまたまオックスフォードグループのメンバーだったのである。

このときのビルの考えが興味深い。彼が求めていたのは、飲酒欲求を抑えるために彼の話を聞いてくれる人であった。それは普通の意味のカウンセラーや相談役ではなく、同じ大量飲酒・問題飲酒というやっかいごとを抱えた仲間であった。自分が酒をやめていると、目の前の相手のために語ってきたことは、今

までの彼を力づけてきたのかもしれない。いずれにせよ、自分の飲酒欲求を抑えるために同じ問題を抱える人と話し合うことだという、ビルの着想が、やがて飲酒問題を共有する仲間同士の自助会としてのAAを形成することにつながっていく。

受け手のボブの側はどうか。ビルと出会った際に、ビルが正直に自分の飲酒体験を語ったことが、初対面の彼の話を聞き続け、彼の提案を受け入れることにつながったと、ボブは語っている。

飲酒体験を正直に語るとは、どのように語ることなのだろうか？ 断酒を目指す語りが、「絶対断酒の誓い」といった形ではなく、むしろ正直に飲酒体験を語るものになるのは、どういうことか？

断酒を目指す語りということで、普通想像されるのは、大声での禁酒の誓いや、飲酒を道徳的堕落と結びつける、宗教的律法主義的な語りである。飲酒体験を語れば、飲酒問題を誰かに責任転嫁したり正当化したりするような（不正直な？）語りもありえよう。あるいは、陶酔にかこつけての「酔っぱらいの与太話」もあるかもしれない。酔っぱらっての与太話や、責任転嫁や正当化の語りが、断酒につながるとはもちろん思えない。そして、ビルの語りはそれらのいずれでもなかった。語られたのは、大量問題飲酒者しかわからない、耐え難い渴望とやめられない苦しさであった。この前提には、断酒が必要であるという倫理的自覚があり、その願いとはかけ離れた問題のある自己の状態が語られる。これが、「正直」な語りである。飲酒体験の正直な語りが、ボブにとっては、渴望と苦しみから目をそらした禁酒の誓いとも、それらを知らない者からの律法主義的な語りとも異なった、当事者の語りにほかならないあかしとなつた。それを聞いたボブは、ビルが自分と同じ、酒をやめられない人間であることを理解する。この理解が、ビルとボブのそれぞれに、断酒をし、それを継続する力をもたらし

た<sup>2)</sup>。

この方法を他にも適用することによって、AAは広まっていく。

## 2.2 内的資源

実はAAの中で、「内的な資源」(inner resources)という言葉が、その初期から使われていた。AAの思想を、体験談を中心によくまとめた、*Alcoholics Anonymous*という書物においてである。1939年に刊行された本書の2/3は体験談であり、また他の部分も、書物などで得られた知識よりはアルコールに耽溺する者の実体験を踏まえ、当事者が読むと、アルコール依存の体験とはまさしくこのようであると実感するような実践的な記述がなされている。この点については後に検討するとして、まずは「内的な資源」についての箇所を引用しよう。

新しくAAにやってきた人が…自分の人生に対する態度が根本から変えられていること、またそうした変化は決して自分だけの力でもたらされたものではないことに気づく…自分が思いもよらぬ内的な資源を掘り当てたことを知る。…彼らがそれぞれに理解した「自分より偉大な力」と呼ぶものである。<sup>3)</sup>

この記述は、*Alcoholics Anonymous*卷末の「靈的体験について」という短い一節にある。正直になることによって断酒できるという話は、宗教的回心によって禁酒できる話のように誤解されがちだ。そして、AAは宗教団体か？どの宗教だ？と参加を躊躇する者があるかもしれない。この記述は、そうしたことで悩まぬよう、AAは宗教団体ではなく、また宗教的回心に似ている例もあるがそうではない断酒体験もたくさんある、と安心させるためのものである。

では、この「内的な資源」とは何か。本文中では、「思いもよらぬ内的な資源」は、「彼らがそれぞれに理解した『自分より偉大な力』」と言い換えられている。「内的な資源」

は彼らの「人生に対する態度」の変化に関わる何かである<sup>4)</sup>。「彼らがそれぞれに理解した」という留保がされていて、そこに入るのには親しい友人でも、配偶者や家族でも、神仏でもよい。あえてこのような（読み手にとってはわかりにくい）留保をしているのは、宗教ではないが人間の精神の問題を扱う領域にとどまろうとしているからと考えられる。宗教との間に、手間をかけてこの一線を引くのは、AAに先立つ宗教的な禁酒運動（AAの出自であるオックスフォードグループも含む）の持つ、律法主義的なある種の偏狭さと、AAの立場とを区別するためのものと考えられる。

なお、この「内的な資源」の文脈では、飲酒問題を抱える当事者自身のための資源というところに力点が置かれており、内的な資源を天然資源と対比しうる文化資源につながるものと直接とらえているわけではない。資源を発見し活用する文脈と、限りある資源を管理し保全する文脈との違いもある。しかし、体験の共有によって文化資源が活用されていくことを押さえている点が興味深い。

### 2.3 禁酒と断酒

筆者はここまで、同じ酒をやめることについて、AAについては断酒、それ以前の禁酒運動に関しては禁酒の語を用いて区別してきた。ここで、筆者が両者をどう分けているかについて触れておきたい。禁酒とは、当事者本人の自発性に依存しない制度的禁酒により、社会や集団内での飲酒行為やアルコールの存在の排除または制限を目指す態度・立場である。1922年に未成年飲酒禁止法を我が国で成立させた立場、アメリカで禁酒運動を行い、1919年から1933年までのあいだ禁酒法を施行させた立場がこれにあたる。一方、断酒は、当事者本人の自発性によるものであり、アルコールが存在する社会・集団との共存を目指すものである。AAの立場は後者である。社会自体から強制的にアルコー-

ルを排除するか（禁酒）、アルコールの存在を許容し問題飲酒者が自発的にコントロールする方法を模索するか（断酒）、とも分けられよう。

AAに先立つ禁酒運動の意義と問題を正しく評価することで、AAにおける断酒の提唱の意義が理解できる。禁酒運動の人間観を表す事例をいくつか取り上げよう。飲酒歴が重なるほど人間的に堕落していくことをわかりやすく示した絵解きの『飲酒歴程 (Drunkard's Progress)』<sup>5)</sup>、アルコール濃度の強さと道徳的堕落度を結びつけ図式化した『道徳体温計 (a moral and physical thermometer)』、夫の飲酒に苦しみながら受けたお告げにしたがって手斧で酒場を破壊して廻ったネイション女史 (Carry Nation)などの事例が示しているのは、アルコールの問題を真摯に憂え、社会全体の問題として告発する姿勢である。大量飲酒が社会の裏側で暗躍する人々と結びつきやすい、また財産の浪費や不品行につながりやすいという指摘はまったくの間違いではなかつただろう。しかし、これら禁酒運動の中にまだ見出されていなかったのは、①本人も周囲も楽しく飲める大量飲酒者と本人あるいは周囲（あるいはその両方）を苦しめる大量問題飲酒者との区別、②酩酊のメカニズムおよび体験の調査と理解、③大量飲酒のメカニズムおよび体験についての調査と理解であった。

周囲からの強制による禁酒は、大量問題飲酒者のみならず、問題が少ない（と自己認識している）大量飲酒者からも反発を買い、肝心の飲酒者たちの理解を得ることが難しいだろう。酩酊のメカニズム及び（主観的）体験の調査がなされなかつたのは、禁酒を説く側にとって酩酊は理解困難、あるいは理解する意義のない混沌状態と解されたからであろう。禁酒を道徳的に説諭する立場は、そこから外れるものを理解困難な者、あるいは非道徳的な者と位置づけることになつてしまふゆえに、大量（問題）飲酒者に禁酒させるか、そうでなければ苦しめるか反撥させることに

なってしまう。飲酒の制度的廃止を主張する前に、これらが吟味されなかつたことが、当時の宗教的律法主義の限界であると考えることができるだろう。

禁酒に断酒を対置することで、問題を特定し吟味しようとしたAAの意義を示したい。

#### 2.4 *Alcoholics Anonymous* という書籍の意義

1939年に刊行されたこの本は、上述したように、2/3が体験談であり、それ以外の部分も実体験に基づいた提案で構成されている。飲酒についての過去の道徳的訓戒や教訓、あるいは医学的な知識は（軽視されているわけではないが）あまり言及されない<sup>⑨</sup>。

AAの特徴としてよく言及されるのは、「言いっぱなし聞きっぱなし」を旨とし、正直に語る限り発言の内容について批判されたり責められたりしないことが保証されるミーティングである。このミーティングの「言う」面が、もっとも重要な活動と見なされることが多い。ある種のカタルシスがそこに生じていると評価するわけである。しかし慎重にAAの活動を吟味すると、カタルシスのみならず、「聞く」ことにより他のメンバーの体験と新参者自身の体験とを慎重に突き合わせながら、複数の作業が行われていることがわかる。「ばなし」の部分は、批判されずに語ることができるとされる場所を確保するために用意されているが、道徳的な相対主義を無条件に認めるわけではない。聞くことに関わる諸作業をみてみよう。

ミーティングで「聞く」ことに関わる複数の作業とは、たとえば以下のようである。聞くことにより、他のメンバーも自分と大筋で同様な体験をしていることを実感し理解する、大量問題飲酒者の問題についての第三者的語りは今まで聞いてきたが、問題を起こす当事者の、当事者としての主観的体験・苦しみや悩みを、自分に代わって言葉にしてくれるメンバーの話を聞く、自分と同様の体験を持つメンバーがいることによる情緒的な安心

感が得られる、少し先を行くメンバーの話を聞き、断酒継続の有り様や工夫を知る、などである。これらからうかがわれるのは、ミーティングはカタルシスの場であるかもしれないが、同様に断酒後の生活を学ぶための学習の場でもあるということである。言うまでもなく、この学習の場において、体験談は知識と情緒両面で不可欠の重要な役割を果たしている<sup>⑩</sup>。本稿の関心からいえば、この、文化資源の学習の場は、メンバーにとっての治療的役割と、文化資源自体の伝達の役割とを、ともに担わされていることになる。

大量問題飲酒者の主観的体験について語られた体験談は、*Alcoholics Anonymous*以前にはほぼ皆無であったし、存在しても酒飲みの与太話とされ、真摯に受け取られることはほとんどなかったと思われる。*Alcoholics Anonymous*は、人類史上ほぼ最初に、大量問題飲酒者の主観的体験について、まとまった事例数を、道徳的説論などを交えずに提示した書物なのである<sup>⑪</sup>。いいかえれば、それまでの宗教家や道徳家の説諭は、データがない状態で行われていた、ということになる。したがって本書にある体験談は、体験談を語る本人にとっても、聞く（読む）当事者にとっても、また家族や治療者にとっても、貴重な文化資源なのである。

体験談に語られるのは当事者たちの置かれた苦境である。周囲の人間にも、しばしば大量問題飲酒者自身にも理解できなかった、アルコールへの強い渴望とその理由。自身や周囲を傷つけ、信用を傷つけ、社会的制裁を受けても、なおやめることのできない苦しさ。これらを理解し、同じ体験に苦しむ者が存在することのもつ治療的意味は、AAの初期メンバーが、（ミーティングがまだない地域で）本書*Alcoholics Anonymous*を読んだだけで断酒できたという逸話が示しているといえよう。

## 2.5 地図としての「12のステップ」

*Alcoholics Anonymous* には、体験談以外の多くの内容が含まれている。大量問題飲酒者の妻や経営者たちのために書かれた章もある。これらの内容は、AAのベテランメンバーが多様な体験をし、また多くの体験談を聞くことから事例をとり、まとめられたものである。

AAを訪れる新参者は、ミーティングに出続けることによってこうした内容を蓄積していく。いわば、AA流の断酒継続のあり方をいつのまにか学んでいくのである。ところで、AAが考える断酒継続の過程は、「12のステップ」という文書にきわめてコンパクトに結晶化されている。

1. 私たちはアルコールに対し無力であり、思い通りに生きていけなくなっていたことを認めた。
2. 自分を超えた大きな力が、私たちを健康な心に戻してくれると信じるようになった。
3. 私たちの意志と生き方を、自分なりに理解した神の配慮にゆだねる決心をした。
4. 恐れずに、徹底して、自分自身の棚卸しを行ない、それを表に作った。
5. 神に対し、自分に対し、そしてもう一人の人に対して、自分の過ちの本質をありのままに認めた。
6. こうした性格上の欠点全部を、神に取り除いてもらう準備がすべて整った。
7. 私たちの短所を取り除いて下さいと、謙虚に神に求めた。
8. 私たちが傷つけたすべての人の表を作り、その人たち全員に進んで埋め合わせをしようとする気持ちになった。
9. その人たちやほかの人を傷つけない限り、機会あるたびに、その人たちに直接埋め合わせをした。
10. 自分自身の棚卸しを続け、間違ったときは直ちにそれを認めた。

11. 祈りと黙想を通して、自分なりに理解した神との意識的な触れ合いを深め、神の意志を知ることと、それを実践する力だけを求める。

12. これらのステップを経た結果、私たちは靈的に目覚め、このメッセージをアルコホーリクに伝え、そして私たちのすべてのことにつきこの原理を実行しようと努力した<sup>9)</sup>。

「12のステップ」からはどのような行動が導かれるのか。1-5までは飲酒問題を自覚し受容することが説かれているが、それにあたり、ひとりで頑張ろうとするのではなく他者の力も借りるよう提案される。この「他者」には、「自分」も「神」も「もう一人の人」も含まれる。4から8は、他者の力を借りながら飲酒以外の問題をも洗い出すプロセスである。8から12までは、傷つけた他者に対して償う準備をし、償いを実行するか、諸事情を配慮して先送りするかを判断することに関わる諸作業である。こうした判断は、触法行為もなしているものにとってはタフなものとなるので、方向修正をする必要が説かれている。1から12までのステップは、とてもひとりではできない。そこでAAでは、先を行っているベテランメンバー（AAではスポンサーと呼ばれる）を新参者が選んで、その人に手取り足取りステップを導いてもらうことを勧めている。「もう一人の人」を見つける作業にあたっては、AAという共同体が経験豊かなメンバーを十分提供できることが前提されていること（これは「12のステップ」には明記されていないが「12の伝統」にはある）に、ご注意いただきたい。<sup>10)</sup>

「12のステップ」を読んで理解し活用するためには、一定以上の経験を要するであろう。ビッグブック（そう呼ばれる*Alcoholics Anonymous*）は、手取り足取りのマニュアルのようにはできておらず、「12のステップ」も簡潔すぎて新参者には不親切である。したがって、ベテランメンバーの助けを借りること

とが前提になっているとみてよい。またベテランメンバーも新参者の世話をしながら、新参者を鏡として自省し、また新参者の役に立つことで、断酒を継続する力を得ることができる。この点で、「12のステップ」は、新参者がベテランと組んだ場合に、AA方式での断酒生活を進めていく（かなり凝縮された）指針になる。

もう一つ、「12のステップ」は、断酒継続の過程をコンパクトにまとめることにより、回復過程の今どこにいるかを指し示す地図のような役割を果たしている。

地図があることでどのようなメリットがあるだろうか。先行するメンバーがどのように回復をしてきているのか、また今日来た新参者は、自分はどのように回復していくのかがおおざっぱにでもイメージできると、先の見えないアルコール問題からの回復過程のどの辺にいるのかを知ることができる。見通しのつかない作業と、おおざっぱでも見通しのついている作業と、どちらが当事者のモチベーションを高めるかは、言うまでもないだろう。

ステップという名称からは、12の段階を踏んで回復するかのように誤解されがちだが、このステップは、むしろ一歩一歩あゆむような、あるいは反復されるダンスのステップのようなものをイメージすべきである。1から12のステップは循環的に反復されるようになっているようである。

断酒しての生活をはじめようにもさまざまな不安がのしかかる。だが、フロイト[1970]もいうように、不安は問題が見えないから強まるのであって、問題を洗い出すことによって不安は減少される。問題を恐れずに洗い出せるように他人の力を借りることを、ステップは提案する。

なお、本稿の趣旨からすれば、なぜ「このメッセージをアルコホリクに伝え」とあるステップの12がもっと強調されないのかという疑問があるかもしれない。AAでは、すべてのステップを十分に踏ました後、「メッ

セージを伝え」ることを重視する。メッセージは断酒継続にとても重要な活動ではあるが、丁寧に自分の問題を見つめるために「12のステップ」をしっかりと使ってみた実感こそが、メッセージを伝える活動にも役立つ。それはとりもなおさず、文化資源としての重要性を確認させ、将来へと残し伝えることとなっていく。したがって、ステップの12だけを強調することはバランスを欠くといわねばならない。

ステップは繰り返し他者と関わることを説く。はじめは先輩の断酒者（4, 5など）と、そして自分が傷つけたりした家族や友人や同僚と（8, 9など）。そして後輩の断酒者と（12など）。現実の出会いはこれらの複雑な組み合わせであり、順番通りこないこともあるだろう。だから他者との問題を初回はうまく処理できずに受け流してしまうこともあるだろう。12のステップ全体で、多面的に自分を見つめ直す作業が反復されているのは、その過程で次のチャンスを待つためでもある。

以上にみると、「12のステップ」は、内省によって問題を洗い出して不安を減少させ、着実な生活改善と、可能な限りの償いを進めいくことを説く。生活改善や償いが進展すれば、生活は良循環の中に入っていく。この過程で新参者の世話をすることは、新参者を通して自らを内省する助けにもなり、また、新参者のために役立つことによる情緒的な力づけも得られる。「12のステップ」は、他のベテランメンバーの存在と相まって、治療過程上の現在位置を確認させて、安心と確実な実践を促す。回復（への道）を語るための言語と体験談は、自分自身にも理解しがたい飲酒体験と言語化しにくい飲酒問題に語彙と形式を与え、他人にも自分にも説明可能なものとさせる<sup>11)</sup>。

こうした、自己認識の方法と、人間関係と行動様式の学習とをセットにしたものが、AAの体験談の中には有形に、メンバーの諸実践の中には無形に、文化資源として存在し

ているのである。

### 3. 文化資源としての AA を持続可能に

ここまでで、文化資源としての AA の特徴と意義を述べてきた。特に「12のステップ」が、AA の二つの構成要素を規定している重要な文書であることを述べた。二つの構成要素とは、回復のための相互扶助（新参者の世話をすることは、メンバーの断酒継続につながる最重要活動である）と、回復のプログラム（生活を方向づけ、治療過程上の現在位置を確認させ、安心と確実な実践を促す）である。そして、この二つの構成要素と補完しあう形で、回復（への道）を語るための言語と体験談が、つかみ所のない（無形の）アルコール依存症という体験に形を与えていた。このような AA は（飲まない生き方を学ぶ）学習の共同体と規定することができ [Lave and Wenger 1991]、学習経験を蓄積しつつ新参者へと伝えていく工夫が求められていた。

有形の天然資源であれば、持続可能にするためには、いかに節約し適切に分配するかということが課題になる。しかし、無形の部分が多い文化資源のはあいには、むしろ実践する担い手がどれだけ深く体得し、その価値を他に伝えるかが、持続可能であるか否かの鍵となる。筆者は「12のステップ」がメンバーの経験の結晶であること、しかしそれゆえにここに明文化されていない前提があることを繰り返し強調してきた [葛西 2007 他]。それらは、*Alcoholics Anonymous* や AA の歴史的経験についての記録を広く読めばほんやりとは伺えるのであるが、その重要性は十分認識されているだろうか。大量の活字を読み慣れていないメンバー<sup>12)</sup>に、口頭で十分伝えられているだろうか。

筆者は AA および他の 12 ステップ系自助団体のメンバーにたいして講演などの機会を得るたびに、AA の歴史的経験から真摯に学ぶことを説いてきた。これには、創始者たち

の体験によって情緒的に力づけられるという意味もある。が、それにもまして、彼らの経験談が、無形の文化資源を獲得する、数少ない経路ということがある。

書物や文書の形をとった有形資源以外の、無形の文化資源。その中には、AA の共同創始者たちが、影響を受けた宗教運動に対してどのように一線を引いたかといった経験も含まれている。アルコール依存症という重い苦しみ、そしてそれにまつわる個人の主観的体験や精神的な悩みを扱う以上、宗教的な雰囲気が作り出されることは避けがたい。けれども AA は自立性を尊重し、宗教的な思想や価値観や組織形態とのあいだに一線を画している。たとえばこの経験が伝えられていないがゆえに、個人の主観的体験の語りが宗教的なテーマに触れるうまく扱えないような事態も漏れ聞く。AA はこれを「伝統」というかなり広義の（曖昧ともいえる）語で表現しているが、「12のステップ」（および「12の伝統」）には明文化されていない文化資源を、意識的に継承していく作業が必要なのではないだろうか。無形資源を「使用して伝える」「体得して工夫する<sup>13)</sup>」ことが重要とあらためて思われる。AA を支援する医療・福祉関係者についても、無形の部分について深く理解する必要があるのでないだろうか。

### 追記

本稿は、2008年6月21日に関東学院大学にて行われた講演「自助の共同体という資源——日本における *Alcoholics Anonymous* の位置」、および鳥取大学での生命倫理特論の講義がもとになっている。当日参加された関東学院大学「依存症とキリスト教」研究会および AA メンバーなどの聞き手のみさん、鳥取大学医学部の安藤泰至准教授、草稿にコメントくださった友人たちに感謝申し上げる。

## 参考文献

1. 葛西賢太「アルコールと生きる、アルコールと闘う」『春秋』486, 487, 488, 490, 491号, 2007年。
2. Jean Lave and Etienne Wenger, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press, 1991.
3. William L. White, *Slaying the Dragon: the History of Addiction Treatment and Recovery in America*, Lighthouse Training Institution, 1999.
4. 葛西賢太・徐淑子「リカバリー・ダイナミクス・プログラム日本導入の意義と可能性——AA プログラムとの共通点・相違点を検討しながら」『日本アルコール関連問題学会雑誌』10: 83-88, 2008年。
5. 葛西賢太「救世軍の山室軍平と禁酒運動——自助努力、社会事業、宗教的救済のはざまで」『駒沢大学心理学論集』10, 2008年。
6. 葛西賢太「アルコール依存からの再生——断酒自助会 AA の機関誌にみる『回復』体験談」『死生学年報』, 第4巻, 東洋英和女学院大学死生学研究所, 2008年。
7. フロイト, S., 井村恒郎訳「制止・症状・不安」『フロイト著作集6 自我論・不安本能論』人文書院, 1970年。
8. World Health Organization, *The ICD-10: Classification of Mental and Behavioral Disorders, Clinical descriptions and diagnostic guidelines*, 1990.

## 【注】

- 1) 大量問題飲酒者とは大量飲酒・問題飲酒をする者である。大量問題飲酒者というとき、筆者は二つの純粹型の間の諸類型を考えている。本人も周囲もほぼ楽しく飲める大酒飲み（循環器系や消化器系に負担をかけて生活習慣病の予備軍であろうとも、依存には至らない）を一方の極におき、もう一方で本人も周囲も苦しむ問題ある飲酒を大量になす者をおく。問題飲酒の基準としては、たとえば世界保健機関が提唱する ICD-10 (International Classification of Diseases) では、強い飲酒欲求の他、たとえば飲酒の開始、終了、飲量をコントロールできること、断酒後の離脱症状（禁断症状）の不快を避けるための飲用、同程度の酩酊に到るのに必要な量が増える（耐性の強化）こと、飲酒以外の楽しみに関心がなくなること、あきらかに有害とわかっているのに飲用を続けることなどがあげられている [WHO1990]。「普通に飲める人」と大量問題飲酒者のあいだに厳密な一線は引けないが、両者を理念的に区別することによりアルコール問題を多様にとらえておく必要を筆者は感じている。
- 2) ピルとボブそれぞれの断酒についての経緯、先行するオックスフォードグループとの関わりについては、拙著『断酒が作り出す共同性——アルコール依存からの回復を信じる人々』世界思想社, 2007年, にて詳述した。
- 3) AA 日本出版局訳『アルコホーリクス・アノニマス——無名のアルコホーリクたち』, 原著第4版からの改訳, 2002年, 571頁。
- 4) 「自分より偉大な力」を、「神」などの超越的存在と解してしまった方が話が早いように感じられるところだが、あえてそうせずに踏みとどまるところに、AAの特徴がある。人間の精神の問題に対し宗教なみの関わりを持ちながら、あえて宗教とは距離をとるときにしばしば用いられる語彙は「スピリチュアリティ (spirituality)」である。「スピリチュアリティ」は日本語ではカタカナで表記されたり「靈性」「精神性」と訳されたりする。これについては、葛西前掲書、また拙稿『『スピリチュアリティ』を使う人々——普及の試みと標準化の試みをめぐって』湯浅泰雄編『スピリチュアリティの現在——宗教・倫理・心理の観点』人文書院, 2003年所収、他で論じた。
- 5) Drunkard's Progress はいうまでもなくピューリタン文学の Pilgrim's Progress (バンヤン著『天

- 路歴程』)のパロディである。『飲酒歴程』はこれを踏まえて筆者が当てた訳であり、定訳ではない。
- 6) 書店に並ぶ自己啓発書が、歴史的な教訓を並べて権威づけようとしていることがうかがわれたり、著者の体験を誇るにおいが鼻についたりするのと比して、本書の内容は、ほとんどメンバーの実体験に基づき、実際の大量問題飲酒を記述しようとしている点で、禁欲的とさえいえる。あえて指摘するなら、「自分で理解した」という留保付きの「神」への言及、「12のステップ」「12の伝統」という重要文書における数の合わせ方に、キリスト教の「12使徒」等との連想が察せられるぐらいである。AAからこうした宗教的モチーフがていねいに取り除かれていく過程については、葛西前掲書に詳述した。
- 7) カタルシスのみならず学習の場であるという点に留意せずにミーティングの形式だけをまねてもうまくいかないはずである。
- 8) アンセルム・ストラウスらによる『慢性疾患を生きる』(南裕子訳、医学書院、1987年)は、医学の進歩にもかかわらず多くの人が苦しむ慢性疾患の患者・周囲の主観的体験を聞き取ったものである。大量飲酒者の主観的体験同様、我慢して沈黙しがちな慢性疾患患者らの体験は、類似の体験を持つ者に対して実践的な教訓と情緒面での力づけ等を提供し、治療的な意義を持つといえる。
- 9) 「自分なりに理解した」の太字強調は原著のもの。オリジナルの英語版でもここがイタリックになり強調されている。
- 10) 「12の伝統」という文書に、そのようなAAを確保するため、集団としての安定や独立のための心得が明記されている。しかし、スポンサーたり得る人々を養成するという問題は、ベテランメンバーたちの経験に任される部分が大であった。この無形の部分をいかに継承し展開するかは、AAにとってつねに重要な課題であったといってよい。米国においては医療制度がAAの12ステップの一部を取り込んだものに改革された。これ自体はAAおよび12ステップの理念が評価されたことといえるが、一方メンバーの経験蓄積(無形文化資源の継承!)という観点からは、一部の運用を医療機関にゆだねることで経験の機会を限定してしまう危機をもたらした。AAが国際的な運動になったとき、書物のみを介しての輸出輸入、また医療制度の変化によって、文書化されていない無形の文化資源をどう伝えるかが、新たな課題として浮上したのである。
- 11) 体験を言語で説明できるような語彙や形式を持つことを、エモーショナルリテラシーと呼ぶこともある。エモーショナル・リテラシーについて、たとえば坂上香／アミティを学ぶ会編『アミティ [脱暴力]への挑戦——傷ついた自己とエモーショナル・リテラシー』日本評論社、2002年や、信田さよ子『加害者は変われるか? —DVと虐待を見つめながら』筑摩書房、2008年を参照。
- 12) アルコール依存症者の向学心や勤勉性を強調すると、世間では驚き疑問を持つ人が多かろう。筆者の調査の印象では、メンバーはほぼ世間の平均以上に向学心が高く勤勉性も高い。これらは高学歴につながるスキルではあっても、対人関係や自己管理のスキルとは別物であり、依存症にいたる、あるいは少なくともそれを止められなかった事情に関わりがありそうである。
- 13) Klaus Mäkeläの国際比較調査などで明らかなように、AAの諸活動の細部は国や文化によってバリエーションがある。米国ではハグ(軽く抱き合うこと)はきわめて頻繁に行われるが、北欧では日本同様にこうした身体接触に抵抗がある。Mäkelä, *Alcoholics Anonymous as a Mutual-Help Movement: a study in eight societies*, University of Wisconsin Press, 1996を参照。見方を変えれば、当地の文化に溶け込んでバリエーションを開拓してこそ深いレベルでの定着もある。無形の文化資源を多く含むAAの場合、これらは、無形文化資源を理解しない学者の手によるのではなく、また理念的概念的な操作によるのではなく、無形文化資源を体得したメンバーたちによって自然になれるのが望ましい。理念的に行おうとすれば、われわれが今まで浸かっている日本文化に対して一定の距離をとれるまなざしと、ある程度の文化的知識が、AAの無形文化資源の理解とあわせて必要であろうが、そうした知的に偏重した操作がメンバーの多くに支持されるかどうかは疑問である。